

島崎藤村



宮沢賢治 志賀直哉 武者小路實篤 有島武郎 森三郎 高村光太郎 谷崎潤一郎 石川啄木 柳田泉 国木田實

新潮日本文学アルバム

島崎藤村

新潮社

評伝 三好行雄
セイ 高井有一

供協力者

有島明朗
石井鶴三
伊東一夫
尾山城仁
川端秀子
神津得一郎
島崎由紀子
高瀬新助
中村俊之
原 晨也
島崎蒨助
島崎緑二

東京都
復興記念館

小諸市役所

岩波書店

学習研究社

筑摩書房

明治書院

馬籠

藤村記念館

編集協力

日本近代文学館

株式会社木挽社



新潮日本文学アルバム 4
島崎藤村

一九八四年八月二〇日発行
一九八五年八月五日二刷

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話(業務部) 03-2661-5111

(編集部) 03-2661-5411

振替東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 九八〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社通信係宛
御送付下さい。送料小社負担にてお取り替え
いたします。

新潮日本文学
アルバム 島崎藤村 目次

木曾谷の旧家の血(明治5年・出生～明治29年)

4

「新しき詩歌の時」を告げる―『若菜集』(明治30年～明治38年)

20

小説家の誕生―『破戒』(明治39年～明治45年・大正元年)

34

危険な恋愛―『新生』(大正2年～大正15年・昭和元年)

65

大作『夜明け前』へ(昭和2年～昭和18年・死)

79

ヘカラー・ページ

藤村像(島崎鶏二画) 藤村の生地・馬籠 妻籠 小諸

大震記念(有島生馬画) 藤村の書・父正樹の書

49

自筆・自装の小屏風 藤村像(石井鶴三作)

蔵書 創作ノート 初版本

評伝

三好行雄

2～96

ヘエッセイ

一枚の写真―木蔭の墓所

高井有一

97

略年譜

主要参考文献

三好行雄

主要著作目録

カバー写真 大正11年8月撮影

折込み巻頭口絵『夜明け前』冒頭原稿

見返しイラスト『夜明け前』ノート(昭和3年4月21日)部分

島崎雪村





前ページ／明治26年9月、平田亮木と東京新橋日吉町の田中写真館で撮影したもの(本文17ページ参照) 教
え子佐藤補子^{さとうほこ}を愛したことから明治女学校を退職、北村透谷^{きたむらとうこ}の紹介によって岩手県一関の熊谷家^{くまが}に赴く直前の写真



大正5年7月、フランスより帰国の時、東京芝二本榎の島崎広助(次兄)宅にて。右より藤村、鶴二(藤村の次男)、楠雄(藤村の長男)、島崎やよ(広助の妻あさの母)、島崎重樹(広助の長男)、榎藤誠子(藤村の弟子)、島崎こま子(広助の次女)。妻フエの死後、4人の子どもの養育を助けるために、次兄広助の長女ひさと次女こま子が同居していた。大正元年6月、ひさが嫁ぎ、こま子1人が子どもの面倒をみていたが、やがて叔父と姪の道ならぬ恋愛におちいり、こま子は妊娠する。深く苦悩した藤村は「眼の眩むような生きながらの地獄」からの脱出をはかり、フランスへと旅立っていく

木曾谷の旧家の血

明治5年・出生・明治29年

←父正樹の絶筆（観音は号『夜明け前』の主人公青山半蔵のモデル。木曾谷で最も古い名家の一つであった島崎家十七代当主。正樹は明治維新に祭政一致の王政復古を信じたが、文明開化の近代は、ことごとく正樹の期待を裏切る。明治19年11月29日、自宅の座敷半で狂死。



明治8年、飛騨一宮の国幣小社水無神社（上）宮司時代の父島崎正樹（右）

はじめに

藤村・島崎春樹は明治五年（一八七二）に生を受け、昭和十八年に、〈皇国〉が〈洋夷〉に敗るる日を見ることなく没した。その生涯はまさしく、日本近代の屈曲にみちたサイクルと首尾を重ねている。

藤村の生まれた明治五年は神祇省が廃され、教部省が設置された年である。太陰暦に代えて太陽暦が採用されたのも、おなじ年の十二月である。翌六年九月には、岩倉具視を全権大使とする伊藤博文・大久保利通らの一行が足かけ三年にわたる欧米視察の旅を終えて帰国している。先進文明に驚倒した岩倉は内政の整備を急務として征韓論をしりぞけ、ために西郷隆盛は参議を辞職した。いずれも、王政復古の理念から、欧米先進国を目

以不勝憂國之

情幾慷慨之淚

之士爲發狂之
人豈其不悲乎
無識人之眼亦
己甚矣

觀齊

途とした文明開化政策への転換という、維新史の重大な屈折を象徴する事件である。以後、明治日本は西欧化即近代化の道を性急に歩みはじめることになるのだが、そこがまた、明治から大正・昭和の三代にわたる藤村の軌跡の始発でもあった。

しかし、三代にわたる作家道程のながい距離に比して、藤村の遺した小説はさほど多くはない。時間と相対化して、むしろ、寡黙な作家だったというべきかもしれないが、そのどれをとってみても、いずれも存在することの意味を賭けた生の証言であり、成るべくして成った必然の作として、誠実な魂の記録を綴っている。『若菜集』から『夜明け前』まで、質としてはやはり巨大な作品群は、単にひとりの作家の思索と苦闘の歴史を刻むだけでなく、明治から昭和への、日本の近代化の過程が内包したさまざまな矛盾を問う重い主題を提示するのである。



父島崎正樹



母島崎ぬい、抱いているのは、次男
広助の長女ひさ(明治23年撮影)

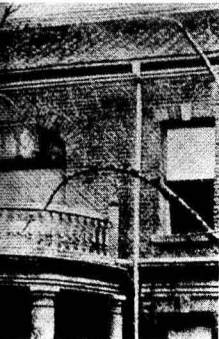
信濃国筑摩郡馬籠村、いまの長野県木曾郡山口村字馬籠は南信の森林地帯をえぐる木曾谷の南端——東西を木曾と飛驒の両山脈にはさまれた細長い溪谷の美濃寄りに位置している。中仙道をゆきかう旅人が足をとどめた宿駅で、『夜明け前』の有名な書きだしどおりの(すべて山の中)の寒村である。土地は痩せて岩石が多く、冬の寒気は殊のほかきびしい。唯一の資源は山のゆたかな樹木だったが、これも尾張藩以来のきびしい禁令で、村民の自由な伐採は許されなかった。そうした生活条件の苛酷な僻地が島崎藤村の生地である。

藤村は明治五年二月十七日に、馬籠宿の本陣・問屋・庄屋を兼ねた旧家に生まれた。四男三女の末子である。二月十七日は生誕

当時の暦法(太陰暦)による日付で、太陽暦では三月二十五日にあたる。一説では二月二十六日の誕生(「戸籍台帳」ともい、これは太陽暦の四月三日にあたる。父正樹は十七代目の当主で、母ぬいは馬籠宿の同族島崎氏の出であった。藤村の本名は春樹、父の愛した庭前の椿の花にちなんだ命名だったという。次姉、三姉は夭折していたが、長姉その(木曾福島の高瀬家に嫁いでいた)、長兄秀雄、次兄広助、三兄友弥が健在だった。藤村の生まれたころ、幕藩体制の末端に位置していた島崎家の家運は、新しい時代をむかえてようやく傾きかけていたが、それでも子どものひとりひとりに下女をつけて養育するなど、旧家らしい暮しぶりはお残されていた(「幼き日」)。



明治2年3月、「忍」下ラ、書付ヲ以テ、歎願奉リ候御事木曾三十三カ村総代として、木曾山林解放を歎願する正樹の書状



→藤村よりさきに上京していた高瀬家の人びと。中央が高瀬薫、左が妻その（藤村の長姉）、右は薫の母たり、抱いているのは愼夫。藤村はそのと愼夫をこよなく愛していた

←明治11年、開校当時の泰明小学校。洋風のレンガ造りで、当時の銀座レンガ街にふさわしい造りであったといわれる。藤村は明治14年から19年まで通学。現在中央区銀座5丁目にある。北村透谷も通学した



父正樹の生涯は『夜明け前』に描かれるように数奇をきわめ、草深い僻地に身をおいて国事を憂い、文明開化の時潮に痛憤して狂を発し、本陣の座敷牢で死んだ。藤村が正樹の血を受け、木曾谷の旧い家に生まれたという事実は、かれの人と文学を考えるうえで重要である。木曾ですごした少年時代は短かったが、父と、父を生んだ風土の影響は眼に見えぬ形で、個性の形成にかかわりつづけたのである。作家生活の最後に、自己の文学の総決算ともいふべき『夜明け前』を、いわば「故郷と父」の

文学として完成するのは決して偶然ではない。晩年の藤村自身に、へ血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさとへの自覚がある。

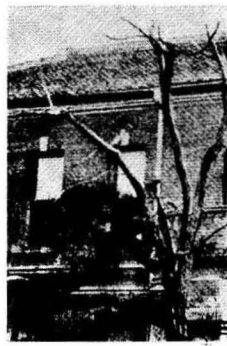
藤村は明治十四年、数え年十歳のとき、長兄秀雄にともなわれて東京に出ている。遊学のための上京である。ようやく奇行のめだちはじめた父親の傍を離れさせるため、という配慮もあったらしいが、実はそれ以上に、島崎家の衰運を回復する期待と願いがこめられていたにちがいない。周囲の人びとは政治家や

許さるべき世
長歌
野村

静か

↑正樹が少年時代の藤村に与えた手習い本

義経賦 一名 藤村 陳古歌
河陸奥守兼鎮守府將軍頼義朝臣及
明君義家朝臣贊
日神之御子乃教生大八洲國歌雅多求
之山道之極國原乃真廣枝那乃在奥乃
磐井之那彼那羅斯乃衣那乃龍居乃世
世升累退番息在母格之族哉家子母澤
在連高決決記輪羅石心雪乃如發樂哉
天皇乃背奉豆朝貢物不持進那居百八
十代人手漸乃如掠護之人草乎者凡教



実業家として身を立てることを希望し、藤村自身も世俗の立身を夢みていて、のちに一高受験に固執することになる。上京後、芝の三田英学校(のちの錦城中学校)や神田の共立学校(のちの開成中学)に学ぶが、その間、物心両面での援助を与えた同郷の実業家吉村忠道に

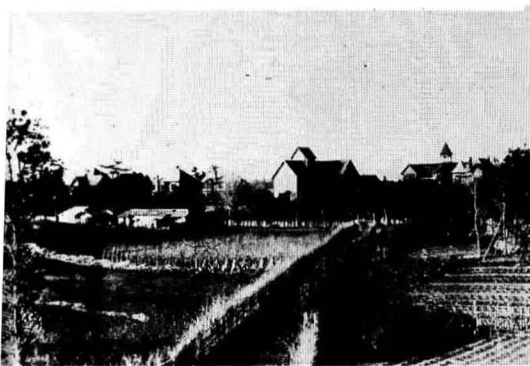
明治14年、藤村上京当時の記念写真。前列右より島崎友弥(三兄)、高瀬愼夫(姉その長男)、藤村(10歳)、大脇古次郎(馬籠隣家の大黒屋次男)、後列右より島崎広助(次兄)、高瀬薫(姉その夫)、島崎秀雄(長兄)

も、ゆくゆくは関係する針問屋を継がせようとのもくろみがあったという(談話「吾が生涯の冬」)。藤村はそうした人間たちの期待を裏ぎり、失望させながら、文学者に変貌していったのである。

父正樹が東京遊学の藤村に贈った歌。「春樹のもとにしるして贈りし古歌 忘らるゝ時しなければ蘆鶴のおとのみだれて声のみぞ鳴」

春樹のもと
古歌
忘らるゝ
時 なければ
蘆鶴の
おとをみだれて
聲のみぞ
鳴

父正樹



開校当時の明治学院遠景。東京府下
荏原郡白金村(現、港区白金台)



明治21年1月、明治学院入学の翌年、15歳



明治22年8月11日、長野の春原写真館にて
右より藤村(17歳)、甥慎夫、次兄広助



藤村が通った明治学院の図書館

藤村を文学に誘った最初の契機は明治二十年九月、英語修得の目的で入学した明治学院普通部本科で用意された。

明治学院はジェイムス・ヘボンらを指導者とするカルヴィニズム系のミッションスクールで、そのはなやかな雰囲気はたちまち、木曾の自然から脱けてたばかりの少年を酔わせることになる。当時の多くの青年たちにそうであつたように、キリスト教は信仰にかかわる教義としてよりも、新しい時代の感覚を伝える思想として、もっと魅力的だったのである。

藤村は明治二十一年の六月に、木村熊二の伝道で洗礼を受けている。読書の体験もしいにひろがって、シェイクスピアやバイロン、シェリーなど、西欧文学の清新な魅力にも眼をひかれた。同窓の戸川秋骨や馬場孤蝶らとの親交もはじまり、西行や芭蕉などの日本の古典からも近代の息吹きにかようロマンティックな感動をうけた。藤村はこうして、思想や芸術のひろい領域に眼をうばわれながら、青春の意味を発見していったわけだが、そのとき、ようやくにしてもたえられなかった



明治24年、明治学院卒業前に。左より、戸川明三（秋骨）、赤田開太、藤村、馬場勝弥（孤蝶）



明治21年6月17日、高輪の台町教会の牧師木村熊三から受洗、その直後6月26日、学友たちと。左より藤村(16歳)、福沢仁太郎(洋画家福沢一郎の父)



島崎春樹の受洗のことが記録されている明治21年6月17日付の「台町教会小会記録」

《私》の覚醒がはやくも、自己の精神の深部にひそむ《憂鬱》の自覚をとまなつていたことにも注意しておく必要がある。それは後年、父と子をつなぐ重要な靱帯となつたが、その間の心的体験はのちの『桜の実の熟する時』で回想されている。

《憂鬱》——一切のもの、色彩を変へて見るやうな憂鬱が早くも少年の身にやつて来たのは、捨吉の寝巻の汚れる頃からであつた。何もかも一時に発達した。丁度彼が匍つて居る草の芽の地面を割つて出て来るやうに、彼の内部に萌したものは恐ろしい勢で溢れて来た。》(三)

少年期における情欲のめざめと、それがすぐさま《憂鬱》と結びつくやうな資質の確認である。藤村が一種の性的頹廢を、旧家の血の宿命として認識するのは、『家』まで待たねばならないが、そうした認識の成立以前の事実として、彼は早くから本能に対する固有の恐怖をなかなば無意識に、自覚していたのである。このとき以後、藤村は内なる自己を凝視して放たぬ眼を獲得した。

明治二十三年二月十四日
 用ひあつてもうとす
 大和君に手紙を介する(一様子に
 けり)上書常任で新聞に寄稿し中
 宜教員に任じられた
 藤村宛に手紙は紅葉の能書書
 月日はあつてもうとす(一様子に
 けり)上書常任で新聞に寄稿し中
 宜教員に任じられた

第三十三巻 第三号
 藤村の「厭世詩家と女性」

第三十三巻 第三号
 藤村の「厭世詩家と女性」

透谷の藤村宛ハガキ(明治25年9月2日付)左は表書き

藤村が大きな衝撃をうけた北村透谷の「厭世詩家と女性」『女学雑誌』第303号に掲載された



北村透谷(後列左端)明治24年ころ、日本平和会の人びとと

明治女学校の校長巖本善治宛のハガキ(明治41年2月14日) 巖本の友嘉志(若松腰子)はバネットの『小公子』の名訳者として知られた

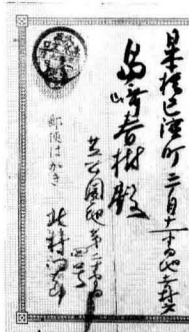
故郷の手紙よなほ愛見し面影
 何處ぞもたふし十三年は小生
 のつと身を束縛するは短き山嵐
 月夜の夢をうりこそ思ひ出で
 るを涙は隠し
 二月十四日
 藤村 透谷

文学者藤村の誕生にとって、もうひとつ大きな意味をもったのは、北村透谷との出会いであった。藤村が明治学院を卒業したのは明治二十四年六月である。卒業後、吉村忠道の経営する横浜の雑貨屋を手伝ったりしたこともあるが、その気の進まない日常から抜けだすきっかけになったのは、木村熊二を介して知遇を得た巖本善治から、巖本の主宰する『女学雑誌』に翻訳を寄稿する仕事を与えられたことである。やがて、その『女学雑誌』の二十五年二月号で、藤村は北村透谷の評論「厭世詩家と女性」を発見する。〈恋愛は人生の秘論なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ〉という書きだしではじまる恋愛至上主義の宣言は、藤村に強い感動をあたえた。愛によって詩人の魂の源泉たりうる女性、結婚によって詩人の魂の束縛者と化すという趣旨のこの論文には、透谷自身の実生活における痛切な体験がひそんでいた。むろん、藤村がそこまで読めていたはずはない。しかし、透谷の文章が秘めた「稀有な情熱」にははげしく動かされ、また、自分の心奥にひそむ表現したい思いが明確な論理として語られている



明治24年、明治学院卒業記念写真。最後列左より2人目藤村、4人目赤田開太(のち藤村が「一小吟」を発表した「文界」を編集)、右より4人目戸川明三(秋骨)、前より3列目右より3人目馬場勝弥(孤蝶)、2列目右より杉森此馬(以下教授陣)、マグリヤ、バラ、ヘボン総理、ワイコフ、マッコレー、石本参十郎、ミス・バラ、3列目右より4人目近藤忠恕、上杉熊松、ランデス

長女英子を抱く北村透谷



ことにも驚嘆した。藤村は感動のうながすままに透谷を訪れる。このめぐりあいは、単に藤村にとってみずからの運命を決定しただけでなく、巖本善治のキリスト信仰と事業を中心に拡大しつつあった青春群像を、急速にひとつの交友圏にまとめあげる端緒になったのである。

巖本の経営する明治女学校の教頭星野天知は、弟・影の友人平田禎木と、おなじ日本橋教会で受洗した関係で親交があった。天知に透谷を紹介したのは藤村である。また、天知は逆に、禎木と藤村をひきあわせた。藤村の明治学院時代の同窓、戸川秋骨と馬場孤蝶もやがて透谷の友人となる。ややおくれてから第一高等学校の生徒上田敏

がこのグループに参加するのも、おなじ一高生の禎木を介してであった——というような形で、キリスト教を核とする交友圏がおのずと形づくられていったのである。かれらは「女学雑誌」の編集や執筆に協力し、この雑誌に独特な文学的雰囲気を与えることになった。しかし、西欧の思想や文学の与える光彩により直接しようとする青春の情熱は、古風な倫理主義を脱しえない巖本善治の限界をおのずとのりこえてゆく。自分たちのためだけの雑誌「文学界」が創刊され、それはひたすらに自我の主観的、主情的な解放をめざす浪漫主義文学運動の母胎となった。